

『召しにふさわしい歩み④』

'22/11/27

聖書箇所：エペソ人への手紙 4 章 30-32 節（新約 p.378）

ヘブル書 11 章には、信仰の戦いを勇敢に戦い抜いたノアやアブラハムなど…、「信仰の勇者」とも言うべきリストが挙げられてあります。そのヘブル 11:13-16 のみことばは、このように教えます。『13 これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。 14 彼らはこのように言うことによって、自分の故郷を求めていることを示しています。 15 もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会があったでしょう。 16 しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさませんでした。事実、神は彼らのために都を用意しておられました。』

⇒ 神様からのお言葉である、聖書のみことばは教えます、神様によって救われた者たちは皆、この『地上では旅人であり寄留者…』なんだって…。天の神様は、真の神様を信じ救われた者たちに対して、素晴らしい「天の住まい」を用意しておられます。また、ピリピ書のみことばは、こう教えてくれています、私たちクリスチャンの『国籍は天にあります。』（ピリピ 3:20）って…。

少しオーバーかも知れませんが、みことばが教えてくれているのは、神様によって救われた私たちが本来居べき場所は、この大阪でも、あるいは日本でもありません！あの、信仰の勇者たちが想い…、憧れていた天国なのです！私たちクリスチャンは、もう既に、天国の国籍を与えられている「天国国民」なのです。ただ今は、その天国からこの地上に、この地に遣わされている、とみことばは教えるのです。

それは一体、何のためなのでしょう？…なぜ、私たちは本来居べき天国に居ないのでしょうか？⇒ I ペテロ 2:11-12 のみことばは、こう教えます。『11 愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。 12 異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。 そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行いを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。』…ここでは、異邦人たちが訪れの日に、神様をほめたたえるようになるためである、とありました。つまり、まだイエス様を信じておられない方たちが、先に救われた私たちの行ないを見ることで…、イエス様のことを救い主と信じて、救われるようになるため…、そのために私たちは今、生かされていると言うのです！

命題：召しにふさわしい歩みとは、どのようなものでしょうか？

では今度、どうやって、そういうことがなされていくのでしょうか？人が救われていくのでしょうか？⇒それは、ここにおられる皆さんの証しを通して、です。先程読んだみことばにあったように、皆さんの立派な行ないを、未信の方たちが見ることによって、その方たちが真の神様の存在や、その教えを知っていくのです！私たちの立派な行ない…、それこそが今、私たちが、エペソ 4:25-32 で学んでいることであり…、また、5 章以降でも学んでいくことなのです。

まず、これまでに私たちが学んだのは…、I・常に、真実だけを語っていくということでありました。II・次に、自分の感情…、特に、怒りという強い感情をコントロールするということでした。III・3つ目は、自分のことだけを考えるのではなく、よく働いて…、他者に尽くす者でありなさい、ということでした。IV・最後に、4つ目に学んだことは、本当に価値あることに目を向けて…、人を霊的に成長させ…、真の神様が喜んでくださるようなことばを語っていきなさい、ということでした。…そういうことのために、今、私たちは、この世に…、それぞれの地に遣わされているのではないのでしょうか？

V・聖霊を 悲しま せない！（30 節）

そこれまで先週までに学んだことでした…。今日は、エペソ 4:30 以降を学んでいきたいと思えます。どうぞ、まずは、エペソ 4:30 だけをご覧くださいませか？そこには、こう記されてあります。

30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。

今日のメッセージもまた、先週から続いていますので、説教のポイントは5つ目からとなっています。…今日は、2つのことを学んでいこうとしています。まず、1つ目は、今お読みした 30 節から、**神であられる聖霊を“悲しま”せてはならない！**ということ。…この 30 節以降は、25-32 節部分の結論的なことが語られてあります。特に、この 30 節は、その中でも中心的な聖句であると言っても言い過ぎではありません。

● 聖霊を 悲しませる とは？

この 30 節に、『神の聖霊を悲しませてはいけません。…』とあります。でも、『聖霊を悲しませる』とは、具体的に、どういうことなのでしょう？どうすることが、聖霊を悲しませることになるのでしょうか？皆さんは、どのようにお考えになっておられますか？

例えば、詩篇 78:40 のみことばは、こんなことを教えてくれています。『幾たび彼らは、荒野で神に逆らい、荒れ地で神を悲しませたことか。』…つまり、神様を信じる者たちが、その神様のみこころに逆らうことで、神が悲しまれる、という趣旨のことが書かれてあります。そこで訴えられてあることは、こうです、「天の神様は、イスラエルの民たちを愛し、彼らを導き、エジプトで虐げられていた所からも救い出してくださったのに…、イスラエルの民たちは、何度も何度も、その神様を欺き、忠実であろうとはしなかった」と言うのです！

今日のみことばである 30 節も同じではないでしょうか？…この箇所に至るまでの流れを、私たちは学んできましたよ？エペソ書の初め…、1 章から教えられてきたことは、神様の恵みであり、神様からの祝福でありました。…一体どれ程、私たちは神様から、たくさんの恵みや過分なほどの祝福を戴いてきたのか、ということが、ずっと教えられてきました。それこそ…、初めは、こんな罪に汚れた私や皆さんが、世界の始まる前から、神様に覚えられ…、神のみこころの内に選ばれていたということです！神様は、私たちをそれこそ…、三位一体なる神様の全エネルギー & 全精力を使って、私たちを、本来受けるべき罪の裁きである地獄から救い出し…、今も、最善をなして、私たちを祝福してくださっているのだ！ということ。私たちが学んだじゃないですか！

それだけじゃありません…。神様は、罪から来る敵意や分裂の中にいた私たちを救い…、平安と一致というものを教えてくださいました。どうぞ、考えてみてください！私たちが罪人が、一致して、ここにこうして、神の家族のようにされているということ自体、神様の大きな恵みであり、とんでもない神様の御業なのです！私たちが、そのような神様の器として用いられるために、今も生かされているのです！

4 章に入った後にも教えられてあったことは…、私たちが神様の器として用いられるために、神様は、私たちに一致を与え、また、御霊の賜物と言うべき…、特別な能力を与えてくださいました。そして、次に、こしばらく学んでいる…、「召しにふさわしい歩み」です。神様は、私たちに、決してできないというようなことを要求したり、命令したりなさるような御方ではありません！神様が、私たちに…、「しなさい！」と命じられることは、必ず、私たちができるのです！そうじゃないでしょうか！

どうか、皆さん、分かってくださいますか？そういうことが、この 30 節で教えられてあることなのです。つまり、私たちが、神様に従っていくことができるし…、神様の御性質に倣って歩んでいけるのです！…私たちが、その理由も…、そのことの必要性も、また、その素晴らしい祝福についても教えられてきました。しかも、

そういったことが、この 30 節まで、何度も何度も命令形で語られてありました！なのに…、どうして、それを実践しようとしなくて、神様に従って歩いていこうとしない、ということが、有り得るのでしょうか？…でも、そういったことが、聖霊を悲しませることなのです！

確かに、聖書のみことばは教えてくれています、「イエス・キリストを信じ、救われた者は、罪の裁きから救われる」って…。その通りです！救われなかった者は、自分の犯した数々の罪の報いである、罪の裁き…、永遠の苦しみを受けなければならない、とみことばは教えます。

でも、みことばが教えることはそれだけではありません！どういうことかと言いますと…、ちょっと皆さん、ローマ 6:23 をご覧ください。『罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。』⇒ここでは、確かに、今私が言ったようなことが教えられています。でも、この直前の 22 節をご覧ください。『しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。』⇒ここでは、「罪の“裁き”から解放されて…」とありましたか？違いますか？「罪の“裁き”から解放されて…」ではなく、『“罪から”解放されて…』とみことばは教えるのです！皆さん、これは大きな違いなのです。

●かつての私たちの状態＝『罪の 奴隷』

「罪の裁きから解放される」というのは、厳密に言いますと、“私たちが死んだ後”のことです。私たちが死んだ後、罪の裁きである苦しみを体験するか否か、ということです。しかし、罪というのは、私たちが死んだ後だけではなくて、今現在も…、私たちに大きな影響を与えています。そうでしょう？

それに対して、みことばは教えてくれるのです！「イエス様を信じて、救われた私たちは、もはや、罪の完全な支配下には居ない！」って…。残念ながら、救われる前の私たちは、罪の完全な支配下に居た、と聖書のみことばは教えます。だから、決して、自分の力で、その罪の支配から逃れることができなかったのです！それを、聖書では、『罪の奴隷』と表現してくれています…。しかし、イエス様を信じて、救われた私たちクリスチャンは、その罪の支配から解放されたのです！

どうか、もう少し前の、ローマ 6:16-22 からご覧ください。『16 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。19 あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。20 罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。21 その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのもの行き着く所は死です。22 しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。』

⇒このように、明らかに、聖書のみことばは、救われたクリスチャンが、もはや、罪の奴隷…、つまり、罪の完全な支配下に居ないことを教えてくれています。だから、この直前のローマ書 6 章前半でも教えられている通り、救われたクリスチャンたちが、救われる前の…、罪に支配されている頃の生き方のままでいるなんていうことはおかしい！有り得ない！と教えるのです。

だって…、普通、罪なんていうものの支配下にあつて…、苦しんでいたり、地獄という結末を知っていて…、そこから解放されたら、何とかして逃げよう…、遠ざかろうとするじゃないですか！それこそが、本当に罪から解放された者が取るべき…、至極当然な行動のはずで、罪から解放されておな…、いろんな言い訳をして、そこから離れようとしなくていい！というのが、ここローマ書 6 章の主張なのです！

どうぞ、もう1度、今日の聖書箇所に戻ってみてください…。ここ、30 節では、『聖霊』のことが、わざわざ、『神の聖霊』と書かれてありますでしょ。どうしてだと思われませんか？⇒パウロは、ここで、私たちに励まそうとして、私たちの内に住んでくださっている御方が、あの聖霊であるというよりも、神様であられる！ということ強調して覚えさせようとしてくれているのです。しかも…、この聖霊なる御方は、私たちのような者を、確実に天国まで導いてくださる御方なのです！

また、聖書のみことばは、こうも教えてくれています、「私たちに与えられている聖霊なる神様は、私たちの内に、9つの霊的な実を結んでくださると…、そう、ガラテヤ 5:22-23 に書かれています。『22 …御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。』…ここで、御霊の実とありますが、原語では単数形で表現されてあるので、厳密に言うると、「9つの…」というのは正しい表現ではないかも知れません。しかし、聖霊は、私たちの内に、こういった実を結んでいてくださるのです。今、お読みしたみことばに、『このようなものを禁ずる律法はありません。』とありましたように、私たちが神様のみことばを守ること、御霊の実を結ぶ障害になることはありません。むしろ、その逆です。神様は、私たちを、そのような…、御霊の実というものが溢れたような者へと、成長させようとしてくださっているのです！

しかし、肝心の私たちの側で、その神様の導きに対して、自分自身を委ねよう(=身を任せよう)としないのなら…、残念ながら、私たちは、そういった御霊の実を实らせていくことはできないし…、神様の喜んでくださるよう生きていくことはできません。

もしも、私たちが罪を犯し続けて、みことばに従おうとしないのなら、それは、御霊なる神様を悲しませながら生きていくことであり…、私たちは、当然、本来のクリスチャンが持つような平安や感謝、また、喜びといったようなものを持つことができないばかりでなく…、自分のような者が救われた、という救いの確信さえも失ってしまいます。

何故なら…、皆さん、覚えてくださっていますか？救いの確信というものは、誰が与えてくださるものでしたか？⇒それは、牧師ではありませんでした…。皆さんのご両親でも、教会の先生でもありません。敢て言うならば、聖書のみことばでもありませんでした…。御霊なる神様が！私や皆さんに、救いの確信というものを与えてくださるのです。1ヨハネ 3:24 には、はっきりと、こう書かれています。『神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられる(=救われている)ということは、神が私たちに与えてくださった御霊によって知るのです。』って…。

その通りです！だから、今日のみことば、30 節後半でも、『…あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。』とあって…、私たちに与えられている聖霊が、救いの確証となり、私たちが確実に救われていることの保証となってくれている、と言うのです。だから、何度も言いますが、パウロは、そんな聖霊なる御方を…、私たちの内に住んでくださっている聖霊なる神様を悲しませるようなことがあってはなりません！と命じるわけです。…「そういったことは絶対に、あなたにとって良いことや祝福とはならない！」そうみことばは教えてくれているのではないのでしょうか？

VI. 悪意 を捨てて、互いに 赦し合い なさい！(31-32 節)

どうぞ、最後の部分を見ていきましょう、エペソ 4:31-32 です。ここでは、6番目に、私たちがなすべきことについて教えられています。それは、すべての悪意を捨てて、互いに赦し合いなさい！ということです。

31 無慈悲、憤り、怒り、叫び、そりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。

32 お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。

● 悪意 の恐ろしさ！

ここで教えられているように、「互いに赦し合いなさい」という言葉の背景には、私たち人間は…、それが例え、クリスチャン同士であったとしても…、お互いに過ちを犯す者である！ 罪を犯す者である！ ということが暗に教えられてあります。

それと、先程、私は、「私たちクリスチャンは、罪から解放されて、罪の支配下には居ない」と言いました。確かに、聖書のみことば(先程見たローマ 6 章)は、そう教えてくれていますでしょ？ しかし…、だからと言って、聖書は、私たちが、今は、もうほんの少しも罪の影響を受けることはない…、とまでは教えてはしません。だって、皆さんもご存知のように、サタンは、マタイ 4 章で、あのイエス様でさえ、誘惑したわけでしょ？ 私たち以上に、知恵も力もあるサタンは、イエス様でさえ…、罪を犯す可能性がある、と考えたのではないでしょか？ …だったら、私たちクリスチャンも、良いか悪いかは別ですが、例え、救われた後であったとしても、罪を犯してしまうというのは、十分、有り得ます。いえ！ 実際、私たちは罪を犯すわけです。

実際、先程見た 30 節のみことばでも、もし、クリスチャンになって、罪を犯すことが完全に無くなるのなら、『聖霊を悲しませてはいけません。』という警告さえ必要じゃなくなります…。それは、つまり、私たちは完全な罪の支配下には居ませんが…、今なお、罪の“影響下”には居ることなのです。言い換えれば、私たちに、選択があるということなのです…。私たち人間は、クリスチャンであろうとなかろうと、皆すべて、罪を犯す者であるから、皆が人を赦し…、また、お互いに赦し合うことが必要なのです。

どうぞ、今日のみことばの 31 節をご覧ください。ここでは、6つの悪いものが挙げられてあります。いつも、していることですが、このように日本語で翻訳されてしまうと、必ずしも、元の言葉と 100%同じもの…、ではなくなってしまうことも有り得ますので、簡単に説明させていただきます。

①まず、最初の『無慈悲』(πικρία)という言葉ですが、ここに記されてある単語をギリシヤ語の辞書で調べますと、「苦味、辛辣」と説明されておりました。でも、ある聖書学者たちは、「相手の和解さえ拒もうとするような恨みがましい思いのこと」と説明するそうです。例えば、相手が赦しを求めて来たとしても、赦そうとしないような…、そんな気持ちのことです。

②次の、『憤り』(θυμός)とは、基本的には怒りの感情のことです。その中でも、特に、爆発的なものを指しています。ギリシヤ語の意味を詳しく取り上げてくれている詳訳聖書では、ここを「憤激、激情」と訳しています。③その次の、『怒り』(ὀργή)とは、先程の憤りほど激しいものではないですが、逆に、もっと長期的で…、ある意味、非常に根深いものを指していると思われれます。④次の、『叫び』(κραυγή)ですが、これは、感情の爆発が声となって出てきたものです。そこには、制御を失った感情…、意識的な行動を表わしていると思われれます。⑤あと、『そり』(βλασφημία)とあるのは、詳訳聖書では、「中傷、悪口、ののしり」と訳されておりました。悪意を持って、人を非難することです。⑥そして、最後の、『悪意』(κακία)とあるのは、これがすべての悪の根源ともなるわけです。詳訳聖書では、「いじわる、邪悪な意志、あらゆる種類の卑劣さ」と訳されておりました。

恐らく、ここで挙げられていた悪のリストは、それらが徐々にエスカレートしていつに思えます。…と言いますのは、①最初、私たちの悪というもの、無関心・無慈悲というような人に関心を示さない…、あるいは、和解しようとし…、または、人の気持ちを察しようとし…、から始まるのではないでしょか？ ②そして、ある時に、他人のしたことに対して、激しい怒りなどを持ってしまいます。しかし、最初は、そういった感情的と言いか…、ある種、一時的なものであったものが、③やがては継続した…、意識的なものになっていくのです。④そして、今度は、それが内的な感情だけではなくてきて…、行動とな

って現われてきます。最初は、それが声だけなのです。⑤しかし、それがやがては、悪口や非難、そういった類のものになっていきます。そして、それがついには、それ以上の悪や犯罪へと繋がっていくのではないでしょか…。

ですから、みことばが教えるように、罪というものは、それを放っておくと、いつの間にか消えて、無くなってしまふものではありません。それどころか、そういった小さな罪を解決していかないと…、そういった悪が、やがて取り返しのつかないような大きな悪へと成長していつにしまふのです！ だから、少し前の 26 節でも、私たちが学んだように、できるだけ早くにそういった罪の誘惑を…、問題を解決するように教えてくれているのです。ここまでは、救われる前の…、かつての私たちの特徴です。

ここまで…、極端に、いつもいつも、悪が成長していくわけではなくても、かつての私たちに、そういった悪を積極的に解決するための手段を持ち合わせていなかった、というのが聖書の教えです。

● 悪に 勝利 する秘訣

でも今、神様によって救われた私や皆さんは、そうではありません…。神様の教えてくださった、積極的な解決方法が私たちに与えられているのです。今日のみことばの 32 節には、こうあります、『お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。』⇒まずは、相手に親切にすること…、そして、あなた自身が心優しい人物と成長していくべきことが教えられてあります。そして、私たちの神様を模範として、私たちが赦しを実践していくことです。

それを可能にしてくれるのは、信仰です！ だって、信仰が無いと、私たちに、私たちを助けてくださる聖霊が居ないからです。それだけではありません。信仰が無いと…、神様が、どんな風に、私たちを愛し、赦してくださったのかということが、本当の意味においては分かり得ないからです。そして、もう1つ言うと…、信仰が無いと、私たちは、最高の赦しというものを経験していないからです。そうですよね！

例えば、イエス様は、ルカ 7:36-47 で、罪の赦しに関して、こんなことを教えてくださいました。『36 さて、あるパリサイ人が、いっしょに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家に入って食卓に着かれた。37 すると、その町にひとり罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏のつぼを持って来て、38 泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。39 イエスを招いたパリサイ人は、これを見て、「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから」と心ひそかに思っていた。40 するとイエスは、彼に向かって、「シモン。あなたに言いたいことがあります」と言われた。シモンは、「先生。お話しください」と言った。41 「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとは五百デナリ、ほかのひとは五十デナリ借りていた。42 彼らは返すことができなかったで、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」43 シモンが、「よけいに赦してもらったほうだと思います」と答えると、イエスは、「あなたの判断は当たっています」と言われた。44 そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。45 あなたは、口づけしてくれなかったが、この女は、わたしが入って来たときから足に口づけしてやめませんでした。46 あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。47 だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。』

⇒皆さん、ここでイエス様が教えてくださった内容を分かってくださいませ？…どうか、今読んだみことばにあった、『**ひとり罪深い女**』という表現や、「余計に赦された…」という表現に感われないでください！ここでイエス様は、誰が罪深いか罪深くないという話をしておられるではありません。…ここで、イエス様は、神様への愛や感謝に関する話をしてくださっているのです。…そうでしょ！

じゃあ、その神様への愛や感謝ですが、ある人はとても大きい、しかし、ある人はそれほど大きくない…。じゃあ、如何にして、そのような違いが出てくるのか？…それは、その人が、自分の犯してきた罪に関する自覚の大きさによるのだ！とイエス様は教えてくださったわけでしょ？…この女性は、自分の犯した罪の大きさ・多さをよく自覚しておりました。一方、パリサイ人のシモンは、その女性に比べると、自分が犯してきた罪の大きさ・多さをあまり自覚できていませんでした。だから、それに応じて、イエス様に対する愛や感謝に大きな差が出ていたのです！

<励ましの言葉>

実は、近頃、私が聞きますのは、今、多くのキリスト教会が、私たち人間の罪の問題や罪の恐ろしさについて、あまり語れないということです。確かに、私が YouTube で、いろんな教会のメッセージを聴いても、神様の愛や私たち人間の価値に関するメッセージは多いのですが、私たちの犯す罪が如何に恐ろしいか、あるいは、その罪を犯し続けることがどれほど神様を悲しませ、私たち自身にも暗い、大きな影を及ぼすことになるのか？というようなことを、あまり聞くことがありません。

しかし、皆さん。果たして、聖書のみことばはどうでしょう？…聖書のみことばを見ますと、確かに、神様の愛に関することや恵みに関することは教えられています。しかし、そればかりではないでしょ？どうか、皆さん、今日引用したガラテヤ 5 章のみことばをご覧ください。そこには、このように教えられています。『**19 肉の行いは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、21 ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。』(ガラテヤ 5:19-24)**

⇒いかがです？…正直、私も、すべてのみことばについて統計を取ったわけではありませんが、このみことばのように、聖書では、比較的多くの場所で、悪と善、あるいは、罪の奴隷や義の奴隷といったように、良いことと悪いことがバランス良く教えられているのではないのでしょうか？

ここガラテヤ書のみことばも教えてくれているのは、私たちには、「肉に従って生きていくか、あるいは、御霊に従って生きていくか、という選択肢がある！」という話じゃありません？…もしも、私たちが肉の欲望に従って生きていくのなら、そこにあるのは、『**不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。**』…でも、皆さん。ここガラテヤ 5:21 の後半に、何と警告されています？⇒『前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。』…つまり、救われていない！ってことでしょ！

だから、どうぞ、**24 節をご覧ください！『キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。』**とあります。ここで、『**十字架につけてしまった…**』という表現には、私が時々言っています、「アオリスト」の時制が使われています。つまり、もう過ぎ去ったこと！私たちが過去に奴隷となっていた、罪という主人を私たちクリスチャンは、もう過去へ追いやって、捨ててしまった！むごたらしく、十字架に磔にして殺してしまったはずなのです！…違います？

ちょうど、それと同じようなことを、今日のみことばの 31 節も教えてくれています。今日のみことばの 31 節には、『**無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。**』とありますが、ここの『**捨て去りなさい！**』という命令形にも「アオリスト」が使われています。しかし、先程のアオリスト時制とは違って、命令形のアオリストは、「今すぐに、捨ててしまいなさい！」という緊急性について教えてくれています。…と言うのは、もしも、その人が本当に救われたクリスチャンであるならば、そのような様々な悪意は、もう既に捨ててしまっているはずだからです！

つい先週も、私たちはメッセージの終わりで、エペソ 4 章が教えてくれていた「**新しい人**を着るべきだ」とか、「古い人を脱ぎ捨てるべきだ」ということを学びました…。先週学んだように、確かに、それを実践する…、実践し続けるのには、ある程度の忍耐や努力、あるいは、工夫も必要です。でも、1 番に必要なことは何でした？…1 番必要なのは、救いです！信仰です！…と言いますのは、私たちが救われることなくして、聖霊なる神様の助けをいただくことも、新しい人をその身にすることも、あるいは、罪の奴隷という状態から解放されることも、決して、できないからです！

果たして、あなたは、本当に救われて、聖霊なる神様を助け主として受けているでしょうか？様々な罪を十字架につけてしまって、過去に慣れ親しんでいた様々な悪意と縁を切られたでしょうか？そこが 1 番大事なのです！…それを、聖書的な言葉で言い換えますと「悔い改め」となります。その悔い改めを皆さんがしておられるかどうかです！…どうか、今日、このメッセージを聴いてくださった皆さんには、その辺りを 1 番に吟味していただきたいと思います。もしも、皆さんの中で、何か質問や「イエス様を信じたい！」という思いがありますなら、遠慮なく、私のところへ来てください！最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。